

頑固な咳について

季節の変わり目に、熱もなく元気なわりに頑固な咳が続いて困ったことはありませんか。子どもの頑固な咳の原因は大人ほど多彩ではなく、まず考えるべきものは喘息です。気管支喘息や小児喘息と呼ばれ、多くの場合はアレルギー反応により気管支の先端に炎症が起こる病気で、気道の過敏性と狭窄（狭くなること）が関係し、咳だけでなく、ゼーゼー、ヒューヒューと音がしたり、重症な場合には呼吸困難（息苦しき）を伴うことが特徴です。発作とよばれる呼吸困難を起こした場合や毎月のように繰り返す場合は、病歴から容易に診断が可能ですが、初めての時には確定診断が難しいこともあります。気管支が過敏な状態のため、日中は咳が目立たなくても激しく泣いた時や運動によつて誘発され、特に夜間や朝方に咳き込むことが特徴の一つです。

診断の基本は経過です。病歴以外にアレルギーの家族歴も参考に

なります。アレルギーの存在が診断の要素になるため、血液検査も必要になります。治療は重症度によつて異なり、喘息治療のガイドラインが利用されています。細い治療には触れませんが、アレルギーを原因とした気管支先端の慢性炎症が病因なので、基本的には長期にわたる治療が必要になります。

カゼ症候群後持続咳嗽と呼ばれ、乾性咳嗽（乾いた咳）が続く病気があります。文字通り、熱などの症状が改善した後、咳だけが続いているという状態です。はつきりした原因は不明ですが、ウイルスなどで障害を受けた気道の炎症が遷延していると考えられています。また、咳喘息と呼ばれるものもあり、気管支喘息と同じようにアレルギーが関係しています。咳喘息では、痰がからまない、むせるような咳がひっきりなしに出ることが特徴です。同じような症状の乳児で三種混合未接種の場合は、百日咳も考慮しなければなりません。

百日咳は、従来乳幼児に多いと考えられていましたが、近年成人の百日咳が問題となつていきました。乳幼児ではカタル期（1〜2週間）・痙咳期（3〜4週間）・回復期（2〜3週間）に分けられ、名前のように咳が長く続きます。痙咳期では、止まらない咳の発作を一日に何度も起こすようになります。乳児期早期の赤ちゃんの場合、呼吸を止め（無呼吸）たり咳に伴ってけいれんを起こすなど、重症になる割合が高くなります。成人の場合は、乳幼児のように典型的な症状ではなく、咳が続くのが唯一の症状です。成人がかかる理由としては、過去に受けたワクチンによる免疫が低下するためと考えられています。

レントゲンで異常がなく、白血球の中のリンパ球が増えるのが検査の特徴です。成人では特徴的な検査所見が見られず、診断の難しい病気のひとつです。初期であれば抗生物質の効果も期待できますが、咳がひどくなってからでは効果は期待できません。咳の治療は対症療法になりますが、思うような効果があげられないことがあります。

頑固な咳にはマイコプラズマ肺炎など、今回解説していない様々な病気が隠れています。咳き込んだり、夜眠れないなど日常生活に影響が出るようなら、我慢しないで早めの受診を心がけてください。年齢が小さいほど重症化しやすい乳幼児の百日咳に関しては、予防が重要です。百日咳のワクチンは三種混合に含まれているので、3カ月以降早めに予防接種を受けるようにしましょう。

ナビゲーター

小児科専門医

川村 和久

仙台市在住



医療法人社団かわむらこどもクリニック医院長。日本の小児科サイトを運営する、言わずと知れた小児科専門医。「お母さん達の心配・不安の解消」を理念に、日々の診療にあたっている。宮城県小児科医会理事。2001年には医師として大変名誉のある日本小児科学会バネリストとして選ばれる。
AERA(アエラ)臨時増刊号 日本初! かかりつけ医を探すガイド「日本の家庭医 08」(7月5日号)の町のお医者さん1435人の中で紹介される。
<http://www.kodomo-clinic.or.jp/>

★「太陽がど暑いもんで」 悠奈ちゃん(4歳)

Magagon 04